4. 青麻山ジオサイト

青麻山（大苅田山）
（山頂の溶岩ドームと周囲の外輪山が柔和な稜線を見せる）

青麻山山頂
（古くは蔵王火山を遥拝する刈田嶺神社が山頂に鎮座した）

青麻山山頂からの眺望
（松川と白石川との合流点付近の景観や太平洋を一望する）

刈田嶺神社（白鳥大明神）
（蔵王火山を神山とする古代以来の信仰を今に伝える）

願行寺廃寺跡
（蔵王山頂に「蔵王大権現」を祀った願行ゆかりの地）

馬頭観音の巨礫
（青麻山から流れ下った巨礫が目印や信仰の対象とされた）

宝龍権現社
（青麻山の裾野に顔を出す岩場の上に鎮座する）

宝龍権現清水
（岩場の裂け目から湧き出す清水に多くの人が集まる）

恵水不動の清水
（青麻火山の噴出物が露出する岩肌を勢い良く流れ落ちる）

恵水不動付近の露頭
（松川の侵食によって現れた青麻火山の噴出物の地層）

向山桃園跡（山家安治君頌徳碑）
（明治期に火山災害を克服するため稲作から桃栽培へ転換）

曲竹丸沢果樹園団地
（果樹栽培に適した地形と土壌を活かして青麻東麓に造成）

青麻山麓の縄文遺跡群（鍛冶沢遺跡）
（青麻山が障壁となって蔵王おろしを避けることができた）

我妻家住宅（江戸中期）
（長大な建物が青麻東麓での豪農層の暮らしぶりを伝える）

笹谷街道（旧羽前街道保存地区）
（陸奥と出羽を結んだ江戸時代の街道の景観を良く残す）

ジオサイトカルテ

サイト番号④

名称	青麻山ジオサイト
テーマ	眠れる山から祈る ―自然神信仰と修験道―
ジオサイトの概要・説明	蔵王火山東方の青麻山と松川下流域を中心とする青麻山ジオサイトは、蔵王火山にまつわる古くからの信仰が息づいてきたエリアである。柔らかな稜線が美しい青麻山は、約40万年前に形成された小規模な成層火山で、比較的短期間で活動を休止した。蔵王火山を望む山頂には、かつて蔵王火山を神山として信仰する刈田嶺神社が鎮座していた。その青麻山の裾野は、「蔵王山」の山名の由来となっている蔵王大権現を蔵王山頂に祀ったとされる平安時代の修験者・願行ゆかりの地と伝わる。また、厳しい蔵王おろしを遮る青麻山東麓の穏やかな土地は気候が寒冷化した時期の縄文人の生活の舞台となり、現在は里芋や蒟蒻といった豊かな農産物の生産地となっている。松川と白石川の合流点には、江戸時代の街道の分岐点となった宮宿も置かれ、大いに賑わった。 現在も活動を続ける蔵王火山より古い時代の火山活動の様子を示す青麻山と、そこを舞台として息づいてきた歴史ある山岳信仰や地域の人びとの暮らしの営みに触れてみたい。

ジオポイント

	名称	概要	分類
1	刈田嶺神社 (白鳥大明神)	蔵王火山を「刈田嶺神」の宿る神山とした古代以来の信仰を今に伝える神社。火山活動を「刈田嶺神」の怒りと考え、これを鎮めるべく祈りが捧げられてきた。	F・G
2	願行寺廃寺跡	蔵王山頂に蔵王大権現を祀ったとされる平安時代の修験者・願行の僧坊跡に建立されて隆盛を誇った願行寺が建立されたと伝わる地。「蔵王山」と呼ぶ由縁はここから。	G
3	馬頭観音の巨礫	伝願行寺跡に程近い道端にあり、馬頭観音が刻まれた巨礫。かつて青麻火山から流れ下ったものだろう。修験者・願行もここに腰を下ろしたかもしれない。	F
4	宝龍権現清水	青麻山の裾野に顔を出す岩肌の裂け目から湧き出す清水。名水として知られ、水を汲む人が絶えない。青麻山への登山道の道筋にあり、下山後の一服は格別。	D
5	青麻山*	約40万年前、一帯が大きな湖だった時代に水中噴火で形成された小規模な成層火山。早くに活動を休止した後に風雨による侵食が進み、柔らかな稜線を見せる。	B・E・G・I
6	恵水不動の清水*	青麻山の裾野に湧出し、岩肌を勢いよく流れ落ちる清水。岩肌は青麻火山の噴出物。松川の侵食作用によって急崖となっており、曲竹水力発電所はこの落差を利用する。	D
7	向山桃園跡* (山家安治君頌徳碑)	幕末から明治時代にかけて蔵王火山から大量の硫黄が流出し、松川流域の稲作が打撃を受けた。これに立ち向かうべく、桃の栽培に賭けた人々がいた。	E・F
8	曲竹丸沢果樹園団地*	青麻山東麓の斜面に造成され昭和60年に完成した果樹団地。果樹栽培に適した地形と土壌を生かして梨を栽培し、5月には山麓が梨の花で白一色となる。	E
9	青麻山麓の縄文遺跡群*	青麻山東麓の丘陵地では数多くの縄文遺跡が発掘されている。青麻山が障壁となって蔵王おろしから守られたこの地は、古くから住み良い土地だったのだろう。	E・H
10	我妻家住宅*	曲竹村の肝入や刈田嶺神社の神職を務めた我妻家の邸宅で、江戸時代中期の宝暦3年(1753年)に建築。青麻山東麓での豪農層の暮らしぶりを今に伝える。	H
11	奥州街道と笹谷街道*	奥州街道は白石川沿い、宮宿で分岐した笹谷街道は松川沿いを通る。平野の少ない山地では河川流域の山裾が主要な交通路となった。	H
12	曲竹一里塚*	松川と白石川の合流点にある宮宿で奥州街道から分岐し、出羽へ至る羽前街道(笹谷街道)沿いに設けられた一里塚。江戸時代の街道整備を今に伝える。	H
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			

＊:調査予定地

青麻山ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：④－１

名　　称	刈田嶺神社 （白鳥（しろとり）大明神）	所　在　地	蔵王町宮字馬場１
管　理　者	刈田嶺神社	管理者連絡先	TEL：0224-32-2615
テ　ー　マ	【青麻山ジオサイト】眠れる山から祈る―自然神信仰と修験道― Ｆ．大地の脅威／Ｇ．信仰と祈り		
サイトの説明	各地で活動する火山は、人びとに大自然への畏怖や畏敬の念を抱かせ、神山として信仰の対象になった。古くは「刈田嶺」と称された蔵王火山も「刈田嶺神」として古くから信仰を集めた。遅くとも奈良時代には信仰されていたと見られ、平安時代の「続日本後期」には、朝廷が刈田嶺神に祭祀料を贈与したことや、位階を授けたことが記されている。当時活発だった蔵王火山の噴火活動を「刈田嶺神」の怒りと考え、これを鎮めることが目的だったと考えられる。 平安時代の「延喜式神名帳」にも記載された由緒ある神社で、江戸時代には刈田郡全体の守り神を意味する「刈田郡総鎮守」とされ白石城主片倉家の保護を受けた。現在の本殿も江戸時代中期に片倉家によって寄進されたものである。 かつては蔵王火山を直接望むことができる「大刈田山（おがったやま、青麻山）」に鎮座したが、後に集落に近い東麓（西宮）に、さらに街道の発達に伴い現在地（宮）に場所を移した。本来、蔵王火山を遥拝する西の方角に建立すべきところだが、現在は街道に沿った方向で建設されている。神社のあり方も時代とともに変化してきたことがわかる。 毎年１月１４日に「どんと祭」暁詣りが開催、百貫締縄の奉納が行われ大勢の人で賑わう。 ※「刈田」は中世以前には「苅田」と表記されていた。 ※刈田嶺神社本殿（享保3：1718年建築）は県指定文化財、拝殿（文化14：1817年建築）・随身門（文政10：1827年建築）・太刀（貞享5：1688年奉納）・白鳥古碑群（寛文13：1673年建立～）・刈田嶺神社絵馬（江戸中期～大正）が町指定文化財に指定されている。		
ジオ要素	・噴火する蔵王火山を神山として崇めた信仰の歴史を知ることができる。 ・かつては蔵王火山を遥拝する場所として青麻山の山頂に神社があったが、その後、時代とともに信仰の形も変化し、青麻山東麓の西宮を経て街道沿いの現在の位置へ移った。 ・噴火活動が活発だった蔵王火山の鎮静を祈る上で、刈田嶺神社が地域の人々にとって大きな拠りどころとなっていた。		
話すポイント	◆歴史 蔵王火山を神山として遥拝する神社であった（大地＝神とする古い信仰）。 信仰と遷座の歴史。人びとの暮らしや旧街道との関係について。 古代には青麻山の山頂に神社があり、そこから蔵王火山に対して祈りを捧げていた。 平安時代には朝廷が「刈田嶺神」に対して位階を授けたり祭祀料を贈与したりしており、火山活動や大地震との関連で山や大地を鎮めようとした意図が窺える。 ◆地形 境内にはイチョウや杉の巨木が多く見られ、昔から安定した環境であることが分かる。 刈田嶺神社のある場所は周囲より小高く小さな山のようになっており、これは松川や青麻山から流れる川が、青麻山の裾野を削り取った後に残った丘である。 宮地区の南にある井戸井山も同じようにしてできた丘。井戸井山には、テレビ番組でも話題になった宮小学校自慢のジャンボ滑り台(全長47m）がある。 ◆その他 ・日本武尊伝説、白鳥碑、坂上田村麿伝説。白鳥大明神。 ・江戸中期に建築された本殿と、江戸後期に建築された拝殿に見られる建築様式の違い。		
注意すべき点	・ジオパークの中での位置づけ（ストーリー性）を意識した説明を工夫する。		
施設、案内板等の整備状況	・国道4号線や県道白石上山線沿いに案内看板がある。 ・境内には白鳥伝説や文化財に関する説明板がある。 ・駐車場は境内入口付近に数台分がある。		
疑　問　点	・遠刈田温泉の刈田嶺神社の狛犬によく似た石像があったのはなぜ？		
提　　案	・神社の縁起や歴史、建造物などについて説明を受けた後、敷地を出て青麻山を展望できる場所まで歩いて行くと、遷座の話や街道のイメージが湧くのではないか。 ・ジオとの直接的な関連が薄いので、景観と併せて関連付けた説明にすると良い。 ・白石城主の片倉家とのゆかりが深く、歴史が好きな人にジオパークに興味を持ってもらう入り口になるのではないか。		

マップ

代表的な写真

随身門

拝殿

本殿

イチョウの巨木

拝殿脇の狛犬

拝殿の彫刻

白鳥古碑群

境内の様子

青麻山ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：④－２・３

名　　称	願行寺（がんぎょうじ）廃寺跡 馬頭観音の巨礫	所　在　地	蔵王町宮字願行寺
管　理　者	－	管理者連絡先	－
テ　ー　マ	【青麻山ジオサイト】眠れる山から祈る―自然神信仰と修験道― Ｆ．大地の脅威／Ｇ．信仰と祈り		
サイトの説明	平安時代に蔵王火山を修業の場とした修験者の願行が、山頂に吉野金峯山寺蔵王堂から蔵王大権現を分祀したと伝えられ、蔵王山の山名の由来とされている。願行の死後、弟子たちによって僧坊の跡地に建立された「願行寺」は平安時代後期には奥州藤原氏の庇護を受けて四十八坊の末寺を擁する大寺院となったが、奥州藤原氏の滅亡とともに衰退し、戦国時代末期には宮本坊（みやほんぼう）、山之坊（やまのぼう）、嶽之坊（だけのぼう）の３寺院だけになった。江戸時代になると山の坊は廃寺、宮本坊は蓮蔵寺となり、遠刈田の嶽之坊が山頂の蔵王大権現（現在の刈田嶺神社）を管理した。江戸時代に御山詣りが流行すると、嶽之坊は蔵王大権現の管理と合わせて蔵王参詣表口を統括し、遠刈田温泉は蔵王参詣の拠点として大いに隆盛した。 願行寺廃寺跡近くの小さな十字路の道端には馬頭観音などが刻まれた巨石がある。表面が丸く削れているので、過去の火砕流や土石流で青麻火山から流れ下った岩石と思われ、古くから土地の人々が目印や信仰の対象として大切にしてきたことが分かる。 ※願行は修験の創始者とされる役行者（えんのぎょうじゃ）の叔父と伝えられる人物。		
ジオ要素	・「蔵王」の名前の由来となった蔵王大権現を請来した願行ゆかりの寺院跡と伝わる地。 ・願行の死後、弟子たちが僧坊を願行寺として引き継いで発展させたと伝わる。 ・願行の足跡は蔵王ジオパークの広域に及び、蔵王修験や蔵王信仰の起点となった。 ・願行寺廃寺跡近くに巨礫があり、馬頭観音が刻まれている。大きな巨礫を運んだ自然の力の凄さを感じることができる。 ・青麻山東麓は「蔵王おろし」を避けることができ、暮らしやすかったためか縄文遺跡も多く見つかっている。 ・根菜類の栽培に適したクロボク土が見られる山裾の緩斜面（曲竹段丘面）ではサトイモが生産され、非常に美味であることから人気も高い。		
話すポイント	◆歴史 願行寺に関わる遺構が見られるわけではなく、口頭での解説が中心となる。 願行寺廃寺跡と青麻山、蔵王火山の位置関係を地図などで示しながら説明する。 青麻火山の泥流起源と思われる巨礫が点在し、願行もその上で修行したのでは？と思いを馳せるのも楽しい。 ◆地形 馬頭観音が刻まれた巨礫は噴火で飛んできたものではなく、泥流や火砕流等で運ばれ侵食や開墾で地表に現れたものであることを解説（最初に「なぜこんな所に大きな石があるのでしょう？」と問いかけてから解説するのも良い）。 青麻山東麓の曲竹段丘面（願行寺、鍛冶沢、山田沢など）で見られる巨石の由来にもふれ、松川周辺の巨礫との違いや共通点について考えてもらう。		
注意すべき点	・願行寺廃寺跡は途中から道幅が狭く未舗装の道路になる。マイクロバスは進入不可。 ・願行寺そのものの痕跡は残っていないので、解説がないとイメージがしにくい。		
施設、案内板等の整備状況	・案内板無し。現在は薬師堂や蓮蔵寺住職の墓碑がある。 ・道が狭く未舗装のため、ツアーでは途中から徒歩での移動が必要。		
疑　問　点	・願行寺廃寺跡そのものがジオとはなりにくいが、蔵王おろしの影響を受けにくいい緩斜面を願行が修行の場として選んだのには、ジオと繋がる理由があるのでは？ ・願行たちはどのような修行・生活を行っていたのか。		
提　　案	・願行の足跡とジオストーリーとの関係性について整理が必要（青麻火山は信仰の対象なのか、自然の地形・環境を活かした修験の行の方法はどのようなものだったのかなど）。 ・願行寺廃寺跡周辺を探索し、当時の僧坊の痕跡を見つけることができないか。 ・馬頭観音の刻まれた巨礫は、大きさを調べて推定重量を算出し、説明に加えてはどうか。 ・青麻火山起源の礫と蔵王火山起源の礫は組成が異なるはずなので、その違いについても見た目で分かる程度の内容で解説ができると良い。		

マップ

代表的な写真

願行寺廃寺跡周辺の様子

薬師堂

江戸時代の蓮蔵寺住職の墓碑

薬師堂裏の巨礫

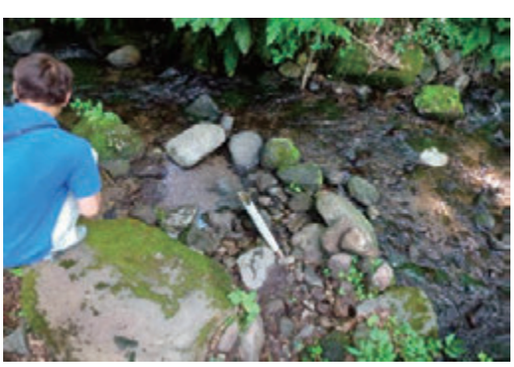
薬師堂下方の緩斜面

馬頭観音の巨礫

青麻山ジオサイト ジオポイントカルテ

サイト番号：④－４

名　　称	宝龍権現清水 （ほうりょうごんげんしみず）	所　在　地	蔵王町宮字沢北
管　理　者	－	管理者連絡先	－
テ　ー　マ	【青麻山ジオサイト】眠れる山から祈る―自然神信仰と修験道― Ｄ．大地の恵みⅠ―温泉・水・鉱物―		
サイトの説明	青麻山東麓の丘陵が水の働きで開析されてできた沢地形（山田沢）に岩場が露出しており、その割れ目から清水が湧出している。青麻山登山道へ続く道筋にあり、古くから人びとの喉の渇きを潤してきた。宝龍権現がいつから祀られているのか、その由緒については詳らかでないが、岩場から清水が湧き出す景観に、いにしえの人々も霊験を感じて水や農業の神とされる宝龍権現が祀られたと考えられる。		
ジオ要素	・地形的に青麻山からの地下水が湧出していると考えられる。 ・周辺の岩盤や河床の礫は、青麻火山に由来する。 ・蔵王や青麻山ができる前の時代に凝灰岩が固まってできた大きな岩。 ・宝龍権現社は江戸時代からあるが、由緒については詳らかでない。 ・宝龍権現は北関東から東北に多く分布し、水や農業の神とされる。		
話すポイント	◆湧水 青麻山の麓にあり、古くから地域の水源として利用されてきた。 今も青麻山へ登る登山者の喉を潤し、また人気のある湧水で遠くから汲みに来る人も多い。 昔から利用されてきた水を実際に飲んで、喉を潤してもらう。 ◆宝龍権現社 湧水のある岩場の上に宝龍権現社がある。 岩場からの湧水に霊験を感じて、宝龍権現が祀られたのではないか。 宝龍権現社の由緒は詳らかでないが江戸時代からあり、水や農業の神である。		
注意すべき点	・水を汲みに来ている人が多いので、駐車場所や説明場所を占有しないよう配慮する。 ・水質調査結果は掲示されており飲用に関しては問題ないとされているが、個人の体質・体調等により健康上の問題が生じる可能性を理解していただき、あくまで自己責任での利用とする。		
施設、案内板等の整備状況	・案内板等はない。 ・駐車スペースは道路脇に普通車1、2台程度。		
疑　問　点	・岩場は青麻火山の噴出物が堆積してできた凝灰岩という理解で良いか。⇒ 溶岩、凝灰岩等の露頭と考えられるが、地質図では青麻山起源の泥流堆積物となっており確認が必要（巨礫の可能性がある）。 ・宝龍権現清水は信仰とのかかわりで清めの水に使用されたのではないか。		
提　　案	・水質や地質との関係、水文環境（雨水がどのような経路を経て湧水しているか）について整理して解説できると良い。 ・湧水を使ってそばを打ったり、お茶を淹れて味わうなど、何らかの体験と併せて利用すると参加者も楽しめるのではないか。 ・町内のほかの湧水を含めて、子どもたちのジオパーク活動として地元の小・中・高校生に水質調査を体験してもらうと良いのではないか（実際の調査・研究を兼ねて、水温・ＰＨ・流量の測定、リトマス試験紙を用いた実験など）。 ・湧水スタンプラリー等のイベントも面白いのではないか。		

マップ	
代表的な写真	 宝龍権現社 宝龍権現清水（水源地） 宝龍権現清水（水汲み場） 駐車スペースはない  川沿いの湧水地点